

整理報告遺跡

野地遺跡

(胎内市大字八幡字野地285ほか)

日本海東北自動車道の建設に伴い、平成17年度に発掘調査を実施しました。遺跡は胎内川の右岸に形成された自然堤防の後背地に立地し、海岸線からは2.6kmの距離に位置します。胎内川を渡る橋の橋脚部分が調査対象であったので、90㎡×5か所という小面積の発掘調査でしたが、縄文時代後期後半から晩期前半（約3,500～3,000年前）におよぶ長期間継続した遺跡であることが判明しました。特に、地下約2mの湿潤な土層中に遺跡がパッキされていたことから、普通の遺跡では失われてしまう木製品や漆製品が多数出土したことが注目されます。ここでは、漆利用に関連する遺物を紹介します。

縄文時代は盛んに漆が利用されました。現在、漆製品の最古例は早期（9,000年前：北海道垣ノ島B遺跡）と考えられています。野地遺跡から出土した漆関連遺物で特に注目されるのは、漆液から不純物を取り除くための「漆漉し布」（写真1）です。束になった糸が螺旋をなすことから、漆を漉すためにアンギン（編布）をねじった様子が良く分かります。全体が赤いのはベンガラなどの赤色顔料を含んだ漆液を漉したからでしょう。漆漉し布は全国的にも出土数が少ない貴重な資料ですが、野地遺跡では2点が確認されました。さらに、漆液を溜めた小型の壺も出土しました。漆液をなでつけた痕が壺の内面に認められ、漆汚れに付いた指紋（写真2）も確認できました。縄文時代の人々は素手で漆を取り扱っていたようです。ほかにも、漆液を調合するためのパレット（写真3）や、赤色顔料が付着した磨石などの漆器製作に関わる遺物も出土しています。

これらの資料から、野地遺跡では、漆液の保存・管理、漆液の精製・調合、塗りなどの一連の作業が行なわれていたことが分かりました。さらに、漆の木が遺跡内で出土していることから、近隣に存在した漆林から漆が採取されていたと考えられます。そして、多数の漆製品（土器・編籠・腕輪・樹皮製品・漆による土器の補修など）が発見されていることから、漆が盛んに利用される集落であったと言えるでしょう。一方、野地遺跡に隣接する同時代の遺跡では、漆製品がほとんど発見されていません。これは、遺物の保存状態の違いによるのか、あるいは遺跡の性格を反映したものなのか。今後、検討しなければならない大きな課題です。（渡邊裕之）



写真1 漆漉し布



写真2 漆容器に残された指紋



写真3 漆パレット